

# 鉄骨だけの無残な姿

## 七万分の一の「松の木」修復

3年前、石巻の日和山公園から見下ろした石巻中心部はがれきの山だった。今回の駆け足の旅で見た限りでは、さすがにがれきはほとんど片付いていたものの、人家やビルなどの建物は建設中も含めても、「復興」には程遠いというのが実感だ。

旅の初日、仙



ようやく見晴台に到着して感涙

台駅から我那覇(久貝)さん運転の車で正午すぎに南三陸町に入った。町の中心部だったと思しき場所にはまったく建物がない。その中で赤さびた鉄骨だけを残した3階建ての建物がぼつんと立っていた。30人以上

が犠牲になった同町防災対策庁舎だ。ここでは女性職員が犠牲になる直前まで防災無線で町民に避難を呼びかけ続けたことでも知られている。

南三陸町はリアス式海岸の地形で、過去にたびたび津波の被害を被っている。1960年のチリ地震のあと、堤防や水門が設置されたが、巨大津波を防ぐことはできなかった。かろうじて残ったのが防災庁舎で「津波を忘れるな」と訴えているように思えてならない。後で知ったのだが、町長はこの施設を「震災遺構」とはせず、取り壊す表明をしたという。

翌日訪れた陸前高田市では「奇跡の一本松」を遠望した。この一帯の海岸には7万本とも言われる「高田松原」の日本有数の松並木

があったそうだ。今は高さ27メートルのひよろりとして頼りなさげな風情の松を除いてなにもない。海水を浴び枯れ死寸前だったのを樹脂などを使って1億5千万円かけて保存した。

「そこまでして保存する必要があるのか」という議論があるようだが、7万分の一で残ったことは奇跡としか言いようがない。少し離れたところに松を望遠で見る高さ15メートルの見晴台が設けられている。急な簡易階段を上るのだが、運動不足と「老い」の身には結構きつい。

やっと頂上に着いた途端、我那覇さんにパラッ

チされた。すごい形相の画像が残っていて、我那覇さんが「ケラケラ」と笑っていた。ぐやじい!。(原)

### 萩莞の平成奥の細道

- ・ 新式の 便座が高いと歎息(短足し)(新装ホテルのウオシュレット)
- ・ 空の青 水の青さに黄色い声(遠野の野に熟女たちの嬌声が)
- ・ カップ見に カップ頭が 集いおり(遠野の河童淵)

・ 自宅忘れても 自分を忘れず 無事帰宅(宅配便の自宅住所を誤記)



三陸鉄道南リアス線盛駅

### 誇大宣伝だったビール付き 感傷込めて宿泊カード記入

災害から復旧した三陸鉄道南リアス線に乗る。車両は1両編成だが、NHKの朝ドラでおなじみの白に赤と青のツートンカラーの車体。観光客を除くと、学生たちの利用客が目立つ。

車内で乾杯しようと始発駅の盛で岩手県産の地ビール「銀河鉄道」を探したが見当たらない。駅員に「銀河鉄道ビール売ってないの」と聞くと、「あれはイベントの時だけです」と冷たく言われ、思い違いにがっかり。

「誰か言い出すだろうなー」と思っていたら、案の定、長老が「三陸鉄道はビ



盛駅近くの喫茶店で休憩

ール付じゃないの」と声を上げた。ドライブ中は飲めない久貝ドライバーさんも入れ、全員で乾杯しようと計画したが、ツアー案内書の誇大宣伝が判明、期待を裏切る羽目になった。

列車は1時間弱で終着駅の釜石に着く。駅を出た後、新日鉄の大きな工場を横目に見ながら、2日目の宿泊施設、ルートイン釜石を目指して歩く。夜の宴会場所をどこにするか、赤ちやちんや居酒屋をチェックしながら、約15分で到着。

ルートイン釜石は今年7月に開業したピッカピカのビジネスホテル。宿泊者カ

### 淋しい東北の町並み

東北の風景は寂しかった。被災地はがれきこそ片付けられていたが、まだ住宅は少なく、人影もほとんどない。内陸部でも、被災地ほどではないが人をあまり見かけなかった。

それを強く感じたのは初日にレンタカーを放した盛駅近くの商店街。街のメインストリート沿いに並んでいる商店には、日曜日だというのにどの店もお客の姿がない。これで店を維持しているのか。かつての「鉄の街」釜石でも昔来た時に比べ人通りのないのに驚いた。

思えば東北は大震災前から人口減少にあえいでいた。新日鉄などの実質的撤退で「鉄の街」は「鉄の街」だった街になった。

そこへ震災の追い討ち。東北では今や震災前に比べ人口が増えたのは仙台だけだという。復興はもろろん、復旧さえままならなければ東北は本当に日本のチベツトになってしまうのでは。

(萩原)

ードの年齢欄に初めて「80」と書き込んだ。「そうだと書きたんだ」。複雑な気持ちを抱いてカードを受付嬢に提出した。(富田)